

幼少期の約束は。

幅滝翔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡が小さい頃、とある少女と『高校生になつたら付き合う』という約束をした。その相手とは、中野二乃である。しかし、2人ともその約束を忘れてしまっている。

だが、その約束を知っている人たちが居る。中野一花、中野マルオ、比企谷小町、比企谷家の母親であった。しかし、4人とも試しているかのように教えもしない。この状況で思い出すことが出来るのか。高校生の間に気づけるのか、…

3
話

2
話

1
話

八
幡

二
乃

八
幡

目

次

6 3 1

1話　～八幡～

『僕——ちゃんの事が大好き！でも、今の僕じゃ君を幸せに出来ない、、、だから、だからもつと大きくなつたら、僕と付き合つてください！』

『なんで今じゃ無理なの？、、、私も八幡のこと大好きなのに！』

『ごめん、本当にごめん。明日家を引っ越すんだ、、、』

『え、嘘、、、な、なんでもつと早く言ってくれなかつたの？』

『だつて言つたら、——ちゃん悲しむと思つて』

『そうだけど、で、でも前日は無いよ！、、、もう私どうしたらいいの

よ、明日から生きていけないよ、うわあーん』ダキ

『ごめん、ごめんよおー！うわあーん』ギュー

1時間弱、2人は抱き合いながら泣いていた。そして——ちゃんが覚悟したようで、、、

『八幡、分かつたよ。じゃあ高校生になつたら私がそつちに行くから！待つてよね！』

『うん、高校生くらいになつてからね！』

は！、、、、、なんだつたんだ？告白シーンみたいな感じの夢は。俺の小さい頃か？でも、そんな約束すらした覚えないんだがな、、、あと変なナレーションが入つたなあ、、、

うーん、でもなんか思い出さないといけないような気がする。それも今すぐに。あ、ダメだ、、、全然思い出せねえ。まあ思い出すのは後でいいか、今は学校行く準備しないと

「お兄ちゃん、早く起きてー。入学式だから早く行くん——つてお兄ちゃん、なんで泣いてるの？」

「え？俺が……泣いてる……？」

「ちよ、お兄ちゃん！大丈夫？今日は入学式だけど休んだ方がいいんじゃない？……」

「いや、大丈夫だ。さすがに入学式は休めない」

「え、でも……」

「大丈夫だつて、嫌な夢見ただけだから、な？そんなに心配しなくてもいいけるぞ？」ナデナデ

「あうう……まあいけるならいいんだけどさ。あ、じやあ久しぶりに一緒に学校行こうよ！」

「うーん、でも自転車だから事故りそうなんだけど……」

「なに言つてるの、お兄ちゃん。徒步で行くんだよ？」

Why？なぜ歩きなんだ、遅刻してしまうだろうが。もしかして小町のやつ俺に遅刻して欲しいのか？それだつたらいくら妹でも却下だぞ！

「まだ6時半だよ？」

は？

「はあ？じゃあまだ起きなくて良かつたじやねえか……」

「お兄ちゃん？昨日自分で7時過ぎに出るつて言つてたじやん！もしかして夢のせいで忘れちゃつた？」

マジ？昨日の俺そんなこと言つてたのかよ……あ、思い出した。そんなこと言つてたなあ、マジでの夢のせいで忘れてたのか……ん？あの夢つてどんなのだつたつけ？忘れてはいけない気がしたけど……まあいつか。忘れるつてことはそんなに重要じやないだろ。

「ふう、準備するか……」

「ご飯出来るから早く降りてきてよね！」ダダツ
……、行くとするか。

こうして俺の高校生活が始まり、時は1年後。俺は高校2年生になっていた。

2話 「一乃」

『僕二乃ちゃんの事が大好き！でも、今の俺じゃ君を幸せに出来ないから、、、、だから、だからもつと大きくなつたら、僕と付き合つてください！』

『誰？誰よ、この子は、、、、。まず私、この子に告白されたことあつたつけ？』

『なんで今じや無理なの？、、、私も――――のこと大好きなのに！』
『ん？ちよ、ちょっと待つてよ。これつて両思いじや、、、え、私いつの間に両思いしてたの？記憶にないんだけど、、、1回この私がどんなこと言うか聞いてみる必要があるわね、、、』

『ごめん、本当にごめん。明日家を引っ越すんだ、、、』

『え、嘘、、、、な、なんでもつと早く言ってくれなかつたの？』

『だつて言つたら、一乃ちゃん悲しむと思つて』

『そうだけど、で、でも前日は無いよ！、、、もう私どうしたらいいのよ、明日から生きていけないよ、うわあーん』ダキ

『ごめん、ごめんよおー！うわあーん』ギュー

なにこれ、、、私小さい頃こんな大胆だつたの？相手の名前が分かればいいのに、なんで思い出せないのよ！、、、あ、引っ越すつてことは今もどつかに居るつてことよね、それが聞ければ今すぐ行くのに、、、つていつまで抱き合つてているのよ、この2人は。早く思い出さないといけない気がするのよね、でも、全然思い出せないわ、、、早く目覚めないかしら、徹底的に姉妹や昔の写真を探してやるわ！

『――、分かつたよ。じゃあ高校生になつたら私がそつちに行くから！待つてよね！』

『うん、高校生くらいになつてからね！』

よし、目が覚めたわ！今日は入学式、、、その前に写真を探そうから。あ、朝食食べてからね？

「二乃ー！朝食はまだですか？というかいつまで寝てるんですか？」
コンコン

「五月？ちょっと待つてね、今すぐ作るわ」ガチャ
「やつとですか、早くよう、、、、い、、？」

「ど、どうしたのよ？なんか顔に付いてる」

「えつと、、、二乃はなんで泣いているのですか？」

「え？」ポロポロ

「わあー、ちょっと二乃ー！どうしたのですか？みんなー、二乃がー！」

ダダダ

「どうしたの、五月？つて二乃ー！なんで泣いてるの？も、もしかして入学式を楽しみにしそぎて？」

なんでかは分からないうわよ、あと入学式はそんなに楽しみにしてない、、、

「四葉静かに、、、二乃はそんなんで泣かない。」

「あ、そうでしたー！」

「もう今日の朝ごはんはカップ麺で我慢しますか、、、」

それじゃ、栄養が偏つてしまふわよ、、、、

「そうですね、そうしましよう！じゃあ私は一花を起ここしてきますね」
なんで泣いているんだろ、私は、、、もしかしてあの夢に出てきた男の子が原因？でも名前が出てこない、私こう見えて人の名前はすぐ出てくるはずなのに、、、早く涙取まつてくれないかな。

こうして入学式は終わつていった。その後、涙はすぐに収まつてくれたけど、心のモヤモヤが残つたままだつた。なので、家に帰つたら早速、昔の写真を見返したりあの子らに聞きまくつた。しかし、あまり情報が手に入らなかつた。唯一分かつたのは、一花が何かを知つて

いるということ。。。一花から情報を聞き出して探して見せるわ！あの男の子を！

しかし、決意したのはいいものの1年が経ち、高校2年生になつていた。

3話 ～八幡～

高校生活を振り返つて

2年F組 比企谷八幡

青春とは嘘であり、悪である。青春を謳歌せし者たちは、常に自己と周囲を欺き、自らを取り巻く環境のすべてを肯定的にとらえる。彼らは青春の二文字の前ならば、どんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げて見せる。彼らにかかれど、嘘も秘密も罪咎も失敗さえも、青春のスペースでしかないのだ。仮に青春をすることが失敗の証とするならば、友達作りに失敗した人間もまた、青春のど真ん中でなければおかしいではないか。しかし、彼らはそれを認めないだろう。すべては彼らのご都合主義でしかない。結論を言おう。青春を楽しむ愚か者ども碎け散れ。あと夢に出てくる女の子を探しているので情報求む！

おかしい……この作文はこれでいいかと思つたんだけどなあ。間違つたこと何も言つてないんだけど。あとこの人めんどくさい

「比企谷。この作文はなんだね？」

「何つて前出てた宿題の作文ですけど？」

「はあ、……どうやつて高校生活を振り返つたらこんな風になるんだ？あと最後の文はなんだね、そんなの夢の中だけだろどうせ」

「いや決めつけないでくださいよ。なんかこう、探さないといけないような気がして……」

「それは気がしているだけだろ？夢の人にはうためその人を探すとかあの映画じやあるまいし。早く現実を見たらどうだ？」

「そんなの分からぬいじやないですか、有り得るかもしれないですし。そんなこと言うから婚期の――

ゴボッ！

「

「すまんすまん。手が滑つただけだ気にするな」

「絶対わざとですよね？もうすぐで当たつてたんですけど俺！」

「わざ」とじやないぞ？ただ私はその記憶が思い出させるためにやつただけで、決してイラついて手が出てしまつたことではない」

自白したよ……この先生

「んん！……てことでやり直してこい。あと部活に入つてもらう」

「分かりましたよ……やり直して来れば……は？いやいや部活つて……なんで命令されないといけないんですか？部活つて自由ですよね、入るの」

「よし、そんなに殴られたいようだな……」ポキッ

「入ります！入らせていただきます！」

「最初からそう言えばいいのに……よし、来たまえ！」

「先生、なんで特別棟なんて来たんですか？」
「部活つて言つただろ？そこに行くんだよ」

「はあ……そうつか」

「ここだ比企谷」 ガラガラ

え、ちょっとまだ心の準備が出来てないよ！相手女子だつたらどうすんだよ。お願ひ男子男子男子！あ、今思えばどつちも無理だ

「先生、ノックしてください……」

女子だつたー！マジかよ……、

「すまんすまん、次から気をつけるとするよ」

「先生それで何回目ですか？」

「ぐつ……」

ふーん……雪ノ下雪乃というのはこういう奴か。懐かしい……ん、どういうことだ？どこで懐かしいと思つたんだろう。毒舌つていふかスバスバ言うところか？でも俺こいつには会つたことないんだけど……、ちょっと待てよ？髪の色はピンクだつたような……ズキツ

「つ！」

「大丈夫か、比企谷！」

「だ、、、大丈夫です」

「、、、先生そちらの人は？」

「あ、ああ。入部希望者の2年F組比企谷八幡だ」

「ふー、入部させられました比企谷八幡です、、、よろしく」

「ええ、よろしく。部長の雪ノ下雪乃よ、、、で、先生は比企谷君をなぜこの部活に入れたのかしら？本人は嫌々な感じがしますが、、、」

「ああそれなんだがな——」

「なるほど、つまり捻くれた性格の矯正と、夢と現実を混ぜさせないようすればいいんですね？」

「まあだいたいそんな感じだ」

「ちょっと！捻くれてませんよ、俺！あと夢と現実は合体させていません！本当になんです！」（多分）

「じゃあ私は会議があるので後は任せたぞ！」

「なあ、、俺は夢と現実合体させてねえんだが」

「そう、、、では何%の自信があるのかしら？それが実際ということが」

「100%、、いや1000%自信あるな」

「ではその証拠は？1000%の自信がある証拠は？」

「、、、、夢でしか今は情報がない」

「そう、、、じやあ私に出来ることは捻くれた性格を矯正する事ね」

「じやあ夢の方は信じてくれるのか！」

「信じている訳ないでしよう？」

「、、、、じやあなぜ先生の言つたこと矯正の方しかやらないんだ？信じてないんだろ」

「信じてないけれど、比企谷君の目が嘘を付いてないからよ。その話の時だけ目が必死だもの。いつもと違つてね」

「ふーん、、、」

「なに？」

「いや、ちゃんと見てるんだなあと思つて。毒舌だけじゃないんだな」

「私のことをどんな風に思つてるのよ、……」

「そりやあ毒舌雪女」

「へえ、そうなのね、……。じゃあお望み通りにしてあげようかしら？」

ニコツ

「す、すいませんでしたーー！」

「はあ、……まあいいわ。改めてよろしくね、奉仕部部長の雪ノ下雪乃
よ」

奉仕部つてなんだ？変な名前の部活だな。ももも、もしかして卑猥な部活だつたりして、……、嫌だぞ、まだ夢の子を探してないのに！」

「もしかして部活の説明受けてないの？、……、最初に言うけど名前だけで決めてはいけないわよ」

「で、ですよね～」

「はあ、……」

「まあこんな感じよ。分かつたかしら？」

「大体は、……」

「そう、……。あ、椅子は後ろのところから取つてちょうどいい」

「お、おう」

はあ、……なんか大変な1年になりそうだな。あーあ、早く夢の女の子に会えたらしいのになあ。いつ会えるんだろう？まず思い出せるのかその女の子を、……明日から探し始めるか。あ、小町にも聞いてみよ。